

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

オランダ マーストリヒト補習校 理事長 柳井 正史

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情ルール
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦労した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

- 児童生徒約30名。（ドイツやベルギーなど他国からの越境通勤通学者も多数）
- 現地校やインター校は閉鎖し、オンライン授業を実施。（2020年5月現在）
⇒ 最新情報では、5月11日から現地校の小学部のみ再開。
中学部は5月末までは閉鎖続行。
- すでに現地校がオンラインに移行しているため、補習校のオンライン授業にも即対応できている。（学年による差はあり）
- 生活はステイホーム。
（スーパーや日用品のお店は時間を短縮して営業。
1.5mの間隔をあけていれば散歩や外出は可能。
車は家族以外は2名以上の乗車は不可）

② 現地の新型コロナウイルス事情

- オランダ全土では、4月30日時点で感染者38,802人、死者4,711人。
(※オランダの人口は約1700万人と東京都レベル。国土面積は九州程度)
- 医療崩壊はしておらず、近郊ホテルが即無症状感染者用に借り上げられている。
- マスク着用の義務はなし。
(販売もほとんどしておらず、街中でマスクをしている人はほぼ皆無)
- 3月中旬に政府から『インテリジェントロックダウン』が発表され、
カフェ・レストランは完全閉鎖。100名以上のイベントは8月末まで禁止。
- テレワークを推奨しているが、義務ではない。(1.5mの間隔を保てば出勤可)
⇒ 実際はほとんどの会社でテレワークに即移行。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- オランダでの学校閉鎖の規制に加え、マーストリヒト補習校が入っているインターナショナルスクール(UWC Maastricht)も休校となり、土曜日に補習校としても使用できなくなったため、当校もオンラインの遠隔授業へ移行。
- 越境して通勤通学する講師および児童生徒が国境封鎖の影響も受けており、上記対策となった。

④ 実際の取り組み

- 3月15日から学校閉鎖となり、昨年度の卒業式は現在延期中。
学校再開後に遅れて実施する予定。
- 臨時の運営員会・講師会を経て本年度の入学式は延期。
始業式と新担任およびクラスの発表を全校児童生徒参加のオンラインで実施。
その後は学年担任講師の指示に従い、クラスごとにオンラインによる遠隔授業を開始。
- オランダの現地校やインター校ではPCやタブレットを授業にしようしており、黒板に代わってスマートスクリーンが各教室に配備。すでにウェブやパワーポイントを使った授業が実施されている。
- また、中学年以上の生徒個々にメールアカウントも学校から与えられており、宿題の送付・提出などすでにオンラインで実施されていることもあり、補習校でのウェブ授業やスクリーンシェアによる授業の進め方にはスムーズに対応。

- スタイホームの中、ウェブ上で同級生に会えることに楽しみを感じている生徒も多い。
- 低学年では保護者が傍にいないといけない家庭が多いが、各クラス当初の30分刻みの授業予定を越えてほぼ丸一日オンラインで授業を実施できている。
- 宿題は印刷が必要な場合もあり、昨今プリンターがない、もしくはあっても機能していない家庭が多く、印刷してスキャンして送付という作業に講師・家庭とも苦慮。中にはスマートペンで直接書き込み、ペーパーレスで対応している生徒もいる。

⑤ 苦勞した（している）こと

- 講師：画面の一部を通してしか生徒の反応が見えず、どこまで理解が進んでいるかの把握が困難。また、事前の準備作業が多く、非常に大変。
- 生徒：オンラインの画面に丸一日集中して授業に参加している苦勞は想像を絶する。（会社の会議でも2時間程度）
- 保護者：低学年や兄弟がいる家庭では、個々の個室では保護者が監督できず、一緒では音声が被るなど苦勞がある。
- 運営：本対応がいつまで続くのか不明であり、限られた予算の中でウェブ会議の新規アカウント購入など費用面での対応に苦慮。
- 理事：オランダ各校と対応のレベルや内容に極端な差異がでないよう、目線合わせに苦慮。学校としての安全確保などの経営責任。
- 教材：日本からの物資の輸送も滞っており、小学部の改訂された指導書など講師用の教材がまだ届いておらず苦慮。
- 特に、新一年生はいきなりオンラインでの開始となり、講師ともども対応に最善を尽くしているが、準備を含めて苦勞が多かった。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 生徒：自宅待機が続く中で、ウェブ上とはいえ、友達に会えて会話ができることに楽しみを感じている様子。
- 講師：生徒が予想以上にオンラインで長時間対応できていること。
- 保護者：普段は見れない子供の授業の様子や進度がよくわかり、宿題など家庭学習の参考となっていること。
- 運営：3月にマレーシアに転校した生徒が、通える範囲に日本人学校や補習校がなく、当校の遠隔授業にマレーシアからの参加を希望され、ウェブでの再会となったこと。

⑦ 今後への課題

- 学校再開への道筋や条件の設定などの運営方針をいかにして決定し、周知徹底させるか。
- 今後第2波や新型ウィルスなどの事態に備えて、今回の教訓や取り組みを次につなげていくこと。
- 遠隔授業期間の学力や教育の質の見極めと遅れがあった場合のリカバリープラン。
- 遠隔授業の児童生徒および講師への負荷の見極め。